

梁代貴族佛教の一面

大 内 文 雄

一

梁帝國五六年の命脈の中、創業の君主たる武帝は、實に四八年の長きに亘ってその位に在った。三九歳より、八六歳の當時稀な高齢で歿するまで、彼は常に帝權の所有主として君臨し續けたが、しかしそのあまりの長壽の故か、梁王朝は武帝歿後に急轉直下崩壞して行く。その原因については現在様々な方面から考究されているが、梁朝滅亡後、最も喧傳されたのが、彼の佛教への心酔である。廢佛論者は言うに及ばず、梁書・南史等の史書にも、彼の過度の奉佛ぶりは批判されている。初唐の道宣が「梁祖年暮、惟トスルミ薰修フ、臣下僣シ風、情言扇ル俗」(續高僧傳卷五・寶瓊傳)と述べているのも、武帝晩年の奉佛の有様を傳えたもので

ある。^①しかし、彼の佛教への傾倒にも自ずと變遷がある。

極く大雜把に言えば、普通二年(五二二)に同泰寺の建立が開始され、大通元年(五二七)完成するや、武帝は同寺に於いて第一回の捨身を行った(この時武帝六五歳)。そしてこの頃より脇目も振らず、心を佛教へ傾斜させて行つたと思われる。本論は、この武帝捨身の以前、天監より普通に及ぶ二五年の間に、家僧として或いはそれに匹敵する厚遇を受けつつ武帝の側近くで活躍した佛僧の動向を眺め、そこから武帝治下の佛教の一端を、改めて把握してみようとする試みである。

ところで、家僧については、既に早く山崎宏氏が、南北朝・隋・唐という長い時間を鳥瞰すべく網羅的に論ぜられ、續高僧傳中より、武帝の家僧として明記されている僧伽婆

羅・法龍・僧遷・僧晏・法雲・慧超・明徹・僧遷（彼のみ後梁代に及ぶ）の八名を検索され、一帝にして八名の家僧なる者を有っていた例は、他に見出し得ないとも述べられている。但し武帝の近くには、彼等の他にもまだ數多の高僧がいた。

出三藏記集を開けて見ると、そこに興味ある事件が見出される。すなわち卷五・新集安公注經及雜經志錄第四の中、薩婆若陀眷屬莊嚴經に關して僧祐が書き傳えている記録である。この一卷二〇餘紙の經典は、郢州の乞食僧妙光が、郢州の僧正に逐われた擧句、都建康に潛入し、普弘寺に於いて偽作したものである。その内容は「薩婆若陀長者是妙光父名、妙光弟名金剛德體、弟子名師子」と注記にあることと、またその經名から推して、砂山稔氏も指摘されているように、妙光の一族を聖家族として喧傳するものであったと思われる。彼等は書寫して屏風に貼り付けさせたこの經典を信者に莊飾供養させ、結果として看過できぬ騷動を都に惹き起すこととなり、主犯の妙光は捕えられ、「妙光巧詐、事應斬刑」との獄牒が下ったのである。これが事の顛末の前半であるが、僧祐は引き續いて次のように記している。

即以_チ其年（天監九年・五一〇）四月二十一日、勅_シ僧正慧

超_ニ、令_ム喚_フ京師能講大師宿德如_ニ僧祐・曇准等二十人、共_ニ至_ニ建康、前辯_ニ妙光事、超即奉_ニ旨、與_ニ曇准・僧祐・法龍・慧令・慧集・智藏・僧晏・法雲等二十人、於_ニ縣辯問、妙光伏罪、事事如牒、衆僧詳議、依_ニ律損治、天恩免_ニ死、恐_ニ於_ニ偏地復爲_ニ惑長繫、東治、即收_ニ拾此經、得_ニ二十餘本及屏風、於_ニ縣燒除、然猶_ニ有_ニ零散、恐_ニ亂_ニ後生、故復略記、

一旦は俗法によつて斬刑に處すと決した事件を、僧祐等二〇人による宗教裁判に差し回し、内律によつて處斷し、死罪を釋したというのであるが、ここに裁判の構成員二〇名の内、九人の名が擧げられている。そして彼等の中、慧超・法龍・僧晏・法雲の四名がそれぞれの傳中に武帝の家僧として明記されている者である。出三藏記集の記録を見ると、宗教裁判を指導する立場にあったのは、僧正慧超であったことがわかるが、高僧傳中に傳すら立てられていない慧令なる人物が加わっていることにも注目される。また梁の三大師として著名な智藏・僧晏・法雲がそっくり参加してもいる。そこで、續高僧傳中に家僧として明記されている前述の八名、この宗教裁判の他の參加者五名を、歿年の順に左に表示してみよう。

天監一四年（五三） 湘宮寺曇准 七七歲（續傳卷六）

天監一七年(五〇)	招提寺慧集	六〇歲(梁傳卷八)
普通三年(五三)	建初寺僧祐	七四歲(梁傳卷一二)
普通四年(五三)	開善寺智藏	六五歲(續傳卷五)
普通五年(五四)	建初寺明徹	年齡不詳(續傳卷六)
普通六年(五五)	靈根寺僧遷	五九歲(續傳卷五)
普通七年(五六)	宣武寺法寵	七四歲(續傳卷五)
普通八年(五七)	正觀寺僧伽婆羅	六五歲(續傳卷一)
(普通三年)	南潤寺慧超	年齡不詳(續傳卷六)
(普通三年)	莊嚴寺僧旻	六一歲(續傳卷五)
大通三年(五元)	靈根寺慧令	年齡不詳(傳ナシ)
大同元年(五五)	光宅寺法雲	六三歲(續傳卷五)
後梁天保一二年(五五)	草堂寺慧約	八四歲(續傳卷六)
	大寶精舍僧遷	七九歲(續傳卷六)

こうしてみるとわかるように、稀な長壽を保った慧約と、一世代遅れて生れ、後梁時代に活躍した僧遷とを除けば、殆どが天監末から普通年間にかけて入寂しており、言わば武帝治世の前半の時期に輩出していたことを示している。^⑤ 彼等の各傳を通覽してみると、武帝によって禮遇されてからの行動には、天子たる武帝の教團統率者としての一面と、一佛教者としての一面とが反映しているように思われる。また目を轉じてみれば、武帝の一佛教者としての行動の中

にも自ずと天子としての姿勢が滲み出、それはそのまま沙門の天子に對する姿勢とも相應するものでもある。以下、齊末梁初の混亂期をくぐり抜けて來た彼等の動向の意味する所を見て行きたいと思う。

二

——曇准・僧伽婆羅・僧祐・慧集——

曇准^⑥は、齊代に北より南遊して湘宮寺に止まり、臨川王蕭映・長沙王蕭晃・廬江の何點・彭城の劉繪等貴顯の尊敬を受けている。彼は涅槃學者であつたが、梁唐二高僧傳には梁代においての事績が何等記されておらず、僅かに「成^ス其業^者二百餘人」とあるのみである。かえって先の出三藏記集によつて、當時の建康における代表的髙僧であつたことが記録されることとなっている。既に言われているように、前朝に崇敬された髙僧が、梁代に及んでも武帝によつて變ることなく遇されていたことを示す一例であらう。^⑦ 彼は北來の僧であつたが、一方、僧伽婆羅^⑧は扶南國より來朝した譯經僧である。彼は齊末の混亂期に身を潛めていたが、梁の天監五年に武帝に迎えられると、勅命の下に次々と都合一部^一の經論を翻譯した。^⑨ 殊に天監一一年(五二二)の壽光殿における阿育王經一〇卷の譯出には、武帝自らが筆受

の任に當り、次いで僧正慧超に引き繼がせて完成せしめ、
 「天子禮接甚厚、引爲^テ家僧^ト」との厚遇を與えている。

僧祐は、天監元年の時に既に五四歳、前朝よりの律學の大匠として令聞高く、また土木の才もあり、屢々武帝の命をうけて方々の大像を完成させている。^①「今上深相禮遇、凡僧事積疑、皆勅就^{キテ}審決^{スル}」^②と言ひ、親王公主貴賓から師として敬われた彼は、梁代初期の代表的高僧であつた。傳中に僧正や家僧の語はないが、彼もまた律學の大家として梁代の僧界に重きをなしていたことは疑いない。慧集も僧祐と同様に傳の中に家僧の語は見えないが、彼もまた前朝よりの論部の大家であり「毎^ニ一^ノ開講^{スル}、負^ツ帙^ヲ者千人」ともあり、僧旻・法雲・慧超（靈根寺）もその講筵に學んでゐる。年齡的には後述する法寵・慧約よりも五、六歳若い。論部の學僧として、翻譯家僧伽婆羅、北來の涅槃學者曇准、律學者の僧祐と肩を並べる存在であつたことは、出三藏記集の記録より窺うことができる。僧旻・法雲等の師としても重きをなしていたであろう。以上のこれ等四名は史料から窺う限り、後述の慧約等に較べれば、武帝との關りの點においていまだ稀薄であるといふものの、佛教界肅正の任に當る者が同時に武帝との個人的關係に連つて行く兆しを見せていると考へてよいと思われる。

——慧約・慧超——

この兩名は、常に武帝の側近にあつて活動し、この點において前述の四名とも、また後述の智藏・僧旻・法雲ともその活動の性質を異にしている。

慧約はここでとりあげる諸僧の中で最も長命を保ち、また武帝の崇敬の厚さは他に類を見ない程のものがある。詔をうけて作つた梁・王筠の碑文に「國師草堂寺智者約法師碑」（芸文類聚卷七六）とあるように、智者の號を授けられて武帝の受苦薩戒の師となり、國師の尊稱をも與えられた梁代隨一の權威者であつた。彼の傳の中には慧約の誕生前、一族の塋墓を占つた者が、「後世、修行して道を得、帝王の師となる者が現われるだろう」と豫言したという傳説が載つてゐる。これなども當時の彼の勢威を物語るものであらう。^③

彼の齊末から梁初にかけての行動については、文宣王會坐の所謂永明の八友の指導者格であつた沈約を抜きにしては考えられない。^④また慧約は周顒や褚淵・王儉等の南齊の代表的人士に禮遇されてゐる。彼はとおむね沈約と行動を共にすることによつて、齊末の混亂期を乗り切つたように思われるが、齊の明帝の頃、彼は沈約に向つて次のように語つてゐる。

貧道昔爲王(儉)褚(淵)二公供養、遂居令僕之省、檀越爲之、當復入地矣、

これは既に指摘されてもいるように、慧約の權力志向を如實に示しているものである。果して彼は、天監元年(五〇二)、尙書僕射となつた沈約の奏請によつて、省内に入ることができる勅許を得ている。慧約五一歳の時である。その後は順調に榮進を遂げ、天監六・七年の頃には殿内に出入するを得、沈約死歿の前年の頃になると、武帝と直接相見えるまでに至っている。慧約傳には次のように言う。

(天監)十一年、(沈約)臨丹陽尹、無何而歎、有愛生之嗟、報曰、檀越福報已盡、貧道未得減度、詞旨悽然、俄而沈殞、故其預契未然、皆此類也、(中略)天監十一年、始勅引見、

武帝の怒りをかい、氣力體力共に失せて悶々の内に時を過していた沈約が、長年身近かにあつた名僧慧約に最近の心境を吐露し、恐らくは最後の救いを求めたのに對し、彼が送りつけた言葉は、道宣も評するようにまことに悽然たるものであり、言わばこの世での絶縁狀とでも言うべき内容のものであつた。沈約は死の前年七十二歳、慧約は六一歳の時のことである。これ以後「去來禁省、禮供優洽」という武帝の尊信を勝ち得た彼は、遂に天監一八年(五一九)、

皇帝の戒師という稀有の榮譽に浴することとなり、傳に言う

自是入見、別施漆榻、上先作禮、然後就坐、皇儲以下爰至王姬、道俗士庶咸希度脫、弟子著籍者、凡四萬八千人、

という威望を確立することとなる。皇帝權力に接近することに専心した結果、家僧以上の尊信と禮遇と、そして何よりも皇帝の戒師という權威を武帝より與えられる成功をおさめたのである。

次に南潤寺慧超は、慧通・僧宗に師事從學し、註で述べたように、慧約と同様、前朝の名徳であり弟子も多かった僧柔・慧次等には學んだ形跡がない。また彼は多藝多才の人であり、この點において武帝の意に協う者であつたと思われる。齊梁交代の際の彼の行動についてはよくわからない。梁代に入ると、「尋有別勅、乃授僧正」とあるように僧正の任に就き、それ以後二〇餘年に亘つて僧正として活動し續けている。彼は普通七年(五二〇)に歿しているから、天監元年(五〇二)から數えると二五年となり、恐らく天監も初期の頃に僧正となつたものであろう。そして天監年間の、恐らくは僧正就任の時期と隔たらない頃に武帝の家僧となつたと思われる。僧正として「凡在縉侶、

威^イ、稟^{リョウ}成^{セイ}訓^{クン}」と言う威令を有する一方、家僧としては王公にも勝る待遇を受けた慧超の姿は、他僧の傳の中に自ずと記録され伝えられている。今、その二・三の例を紹介して、家僧と僧正との両面を兼ねた慧超の行動を見ておきたい。

天監五年(五〇六)、僧正慧超は武帝の勅をうけて、この年都に戻った僧旻の住房を訪れ、法龍・法雲・周捨等と共に華林園において道義を講論するよう依頼している(續高僧傳卷五・僧旻傳)。この記録は、僧正でありながらもこの時点で既に、家僧としての面をも有していた慧超の姿を示すものである。

また、齊隆寺は前住者の法鏡が齊の永元二年(五〇〇)に歿してより、後繼者がおらぬままに空席となっていたが、天監七年(五〇八)に至り、法龍を後任に据えることとなった。この時、法龍を後任に充てるべく武帝に進言したのが僧正慧超である。結果として「匡^ニ正^{スル}寺廟^ニ、信得^ニ其人^ノ」との詔が下っている(同卷五・法龍傳)。

また、先にも紹介したように、天監九年(五一〇)、妙光が諸經より抄出して薩婆若陀眷屬莊嚴經を偽作し罪に問われた事件では、慧超が僧正として武帝の詔をうけ、僧祐等二〇名の實力者達を一堂に會せしめて審問を行っている。以上の二例は、武帝の信任の下に、僧正としての任務を果

している慧超の姿を伝えるものであろう。

また、天監一八年(五一九)、武帝は等覺殿において菩薩戒を受けたが、これより以前、武帝は受戒するに先立ち、僧正慧超に勅して、皇帝の戒師として適當な、長老で且つ徳望ある者を挙げしめている。慧超はこれに應じて法深・慧約・智藏の三名を挙げたが、既に武帝の意中には慧約があり、結局慧約を受戒の師と定めたと言う(同卷五・智藏傳^⑦)。これは、慧超が僧正と家僧との両面を保ちつつ、武帝に近侍していたことを伝える例である。

— 智藏・僧旻・法雲 —

彼等三名は、續高僧傳卷一五・義解篇論に、時^ニ有^リ三大法師雲・旻・藏者、方^ニ駕當途^ニ、復稱^ニ僧傑^ト、と言われているように、梁朝を代表する學僧である。しかし道宣は同時に、

榮冠^ニ道俗^ニ、行業相兼者、則開善智藏、抑其人乎、餘則慧解是長、儀範多雜、非^レ無^ニ十數翹楚^ト、修^ニ細行^ニ、然^レ定學擲^ニ心^ニ、未聞^ニ於俗^ト、

とも言い、梁代の一般的潮流に對して、彼一流の批判を行っている。ところが一人智藏に對してのみはその鋒先を抑えており、これは、有名な武帝との白衣僧正論争における智藏の獨立不羈の姿勢に共感しているからに他ならない。

智藏は若い頃、僧祐や僧遠・弘宗を師とし、また僧祐の師法獻の下にもあつたが、後、齊代きつての學僧である僧柔・慧次に受學している。「當時柔次二公、玄宗、蓋世」(智藏伝)と評される二人に學んだ經歷は、僧旻・法雲と共通しているものの、法獻・僧祐の下にあつて律典を學んだところに、彼等とは一線を畫するものがある。これが武帝との間に論争を生む下地となり、引いては道宣の高い評價につながっていると見るのができよう。次いで傳には齊末の混亂を避け、以前に竟陵王の要請により講師として赴いたことのある會稽に行き、終世の隱棲の場所として法華山を選んだことを記している。永元二年(五〇〇)、すなわち世に惡童天子として名高い東昏侯の代である。従つて智藏の行動も、單に隱棲と言うよりは、身の危険を感じての避難と言つた方がよい。資治通鑑卷一四二・永元元年の條には、東昏侯の兇行を述べる中で、次のような事件を傳えている。

又嘗至定林寺、有沙門老病、不能去藏草間、命左右射之、百箭俱發、

このような事態は、嘗て、定林寺において僧遠や法獻に學んだことのある智藏ならずとも、身の危険だけでなく、齊朝滅亡の前兆を感ぜしめるに充分のものであつたに違ひな

い。果してその翌々年、齊梁間の交代が起り武帝は即位する。この時智藏は、宛も平和の到來と定着を見定めたかのようにして都に戻っている。その後は、武帝以下の尊信をうけ、また武帝の、法會と組織統制の優越者支配者たらんとする野望を押し止め、殊に白衣僧正論争に關しては、法雲をして「常於義理之中、未能相謝、一日之事、眞可愧服」と嘆ぜしめる毅然とした姿勢を滿天下に示すに至る。但し、武帝にとつて尊敬すべき人物であつたにせよ、決して心地よい相手でなかつたことは、先に述べたように、菩薩戒を受けるに際し、戒師として智藏を選ばずに慧約を採つたところにも窺い知ることができよう。智藏の傳には家僧や僧正の語は見えず、かえつて彼は、

皇太子尤相敬接、將致北面之禮、……降尊下禮、就而謁之、從遵戒範、永爲師傳、

とあるように、皇太子蕭統に師傳として厚遇されているが、その歿後は鍾山獨龍阜に勅葬されており、武帝の崇敬の程も窺い得る。

智藏が武帝に對し「持操不改」の行動を取り續けたのに對し、僧旻・法雲においては聊か様相を異にしている。

僧旻と法雲とは同年生れの法友である。二人共に僧柔・慧次・寶亮に學び、また先に述べた慧集にも學んでおり、

その交遊は終生變らなかつたと思われる。南齊末、法雲は母の喪に服し「毀瘠過禮、累日不食、殆不勝喪」という行動を取ったが、僧旻は、それを出家者としての範疇を踏み外すような行爲として把え、法雲をたしなめている。兩人の傳を仔細に見れば、彼等の性格の相違が自ずとその行動に反映しているようである。

齊末の彼等の動向について見ると、法雲に關しては何等記すところがないが、僧旻に關してはかなり詳しく書き記されている。

永元元年、勅僧局請三十僧、入華林園夏講、僧正擬旻爲法師、旻止之、或曰、何故、答曰、此乃內潤法師、不能外益學士、非謂講者、

これは僧旻の、宮中における法會に對する批判でもあるが、しかし「齊曆橫流、道俗昏蔽、時寵小人、世嫉君子」との狀勢を見るに及ぶと、建康政界の危險と混亂とを避け、彼の郷里でもある吳の地に入る行動を起している。

従つて、先の彼の言葉も、ただ高踏無益の法會に對する批判とばかりは受けとれず、僧旻としては、東昏侯の宮中の講會に喜々として臨むことに、明らかな危險の兆しを感じ取つていたと見てよいであらう。この推測は、

皇梁膺運、乃譚然自遠、言從帝則、以天監五

年、遊于都輦、

という彼の梁朝成立後の行動からみても可能なことである。「遊于都輦」とは言うものの、これは明らかに世間の歸趣を見届けた上での行動であり、僧旻四〇歳の身の活躍の場を再び都に求め、譚然として、舞い戻つたのである。智藏が法華山に難を避けた時、既にそこで世を終える覺悟をしていたのに比べ、僧旻は明らかに一時的避難を意識して地方に身を潛めていたことが窺われる。齊代、竟陵王の世子蕭穎胄からの會稽赴任に同道するようとの申し込みに對して、にべもない返答を浴びせた彼が、天監五年に都に出てからは、武帝の恩寵を受け、六年以降においては遂に帝の家僧となり、大法會の講者としてまた書物の編纂者として、華々しい活躍を續け、晉陵の太守蔡掾をして、昔仲尼素王於周、今旻公又素王於梁、と歎ぜしめる程の聲望を勝ち得るまでに榮達している。このような結果は、蕭繹の「莊嚴寺僧旻法師碑」(藝文類聚卷七六所収)に、「本姓孫氏、有吳開國大皇帝其先也」と言う出自と共に、己れの才への自負がもたらしたものと見えようが、慧約等と共通する權威志向的性格をも推量させるものがある。

一方法雲は、天監七年以降に家僧となり、また光宅寺主

ともなっているが、普通六年(五二五)には大僧正となつて
いる。彼も慧超と同様に、家僧と僧正との両面を兼ね備え
ていた人物である。但し、彼がいつ頃に僧正になったかは
明らかでない。ところで、家僧としての法雲の一面を示す
と思われる例が、法雲傳の中に記録されている。

(法) 雲以_ニ天監末年_一、欲_ニ報_ニ施主之恩_一、於_ニ秣陵縣同
下里中_一、造_ニ寺一所_一、勅_ニ以_ニ法師建造_一、可_レ仍_ニ以_ニ法
師_一爲_ニ名_一、

とあるもので、法雲は、施主の恩、即ち武帝の恩寵に報ず
る意圖をもつて一寺を造營している。その際、資金は家僧
としての資給物より出たであろうし、その目的も武帝のた
めの修福にあつたであろうことが推察される。この法雲の
行爲に對し武帝は、寺に法雲の名を稱することを許して彼
の意に酬いたのである。

僧旻と法雲とは同じ武帝の家僧ではあるが、自身が行う
齋會に對する姿勢には大きな差があつたようである。今、

このことを示す例を兩人の傳より擧げてみよう。僧旻は批
判的であり、法雲は積極的であつた。

僧旻の弟子が「和上所_レ修功德誠多_一、未_レ始_ニ建_ニ大齋會_一、
恐_ニ福事未_レ圓_一、」と問いただしたのに對し、僧旻は「大
齋乃有_ニ一時發起之益_一、吾寡乏人力_一、難_レ得_ニ盡_ニ理_一」と一

應は現狀を是認するかのような返答をした後、徒らに數量
を誇る法會の有様を批判して次のように言う。

(前略) 如復求_ニ寄_ニ王宮官府有勢之家_一、使役雖_ニ多_一、彌_ニ
難_ニ盡_ニ意_一、近識觀_ニ之_一、藉_ニ此_ニ開悟_一、智者窺_ニ之_一、有_ニ
求_ニ名之謂_一 (以下略)、

これに對し法雲は、自ら大々的に法會を行つてゐる。そ
のきっかけは、天監一八年の武帝の受菩薩戒にあつた。こ
の時戒師となつた慧約は、「自_レ玆_ニ厥後_一、王侯朝士法俗傾_ニ
都_一、或有_ニ三年臘過_一於智者、皆望_ニ風奄附_一、啓受_ニ戒法_一」
というように、宛も敎界に君臨するような勢威を示したが、
法雲はこの趨勢に向つて斷固反對する一方、「當_ニ先發_一願_ニ
若得_ニ相應_一、然後從受_一」と言ひ、華林園光華殿において盛大
な千僧大會を設けている。このように法雲は僧旻と異り、
時流に逆らわぬ考えの持主であつたと共に、あくまで自己
の位置を主張して止まぬ性格の人物であつたらしく思われ
る。

——法龍・僧選・明達——

法龍は、年齢的には前述の僧の中で最准・僧祐に次ぎ、
慧約より一歳年長であるが、法系の上では本稿でとりあげ
る誰とも異り、僧周・曇斌等に學んでゐる。彼が天監七年
(五〇八)僧正慧超の建言によつて齊隆寺の寺主に着任した

ことは既に述べた通りである。その後、武帝より上坐法師と呼ばれ家僧として遇されたが、また齊隆寺が宣武寺と改名され、規模を大きくするに至ると、東昏侯に誅殺された武帝の長兄宣武王蕭懿のために修福供養を行う任務を帯びたものと思われる。「勅施車牛人力衣服飲食、四時不絶」という厚遇をうけた法龍は、武帝の一族のために福を祈るという最も家僧としての語義にふさわしい生活を送っていたと言えるのではないだろうか。しかもこの法龍が出三藏記集所掲の審問に名を列ねてもおり、注目されるところである。

僧選は寶亮に師事しており、僧晏・法雲とは同門の後輩である。彼の傳は短く、詳しいことは窺うべくもないが、僧選が武帝の家僧となつての後、天監一六年(五一七)夏に起つた逸話を次に紹介してみる。慧詡なる僧が或る夜、武帝の下に行き法會の相談を行ったところ、これを聞きとがめた僧選が、滿坐の中で慧詡に向い、

我與卿同出西州、俱爲沙門、卿一時邀逢天接、便欲陵駕儕黨、我惟事佛、視卿輩蔑如也
と、その非を鳴らしたという。この僧選の言葉から察するに、慧詡——彼もまた家僧に類する人物であつたらう——は、同僚の上に立つとうとの野望をもつて武帝に取り入つて

いたように思われる。既に天監年間において、こういった倭倅の僧が武帝の周圍には存在していたことを示す一例である。

最後に明徹は、六歳で父を失い、僧界に入ってから學ぶに師友なき境遇であつたが、後、僧祐・僧晏に學び、そこから武帝の家僧としての榮譽を得るに至つた人物である。その彼の傳には、死に臨んでの彼の上呈文と、それに對する武帝の返書とが收載されており、家僧というものに對する兩者の意識をかなりの程度に汲み取ることができる。そのあらましを次に抜き出してみよう。

(前略) 明徹本出東荒賤民而已、微有善識、得廁釋門、……遂親奉御筵、提携法席、且仁且訓、備沐恩獎、恒願舒展丹誠、奉揚慈化、豈意報窮、便歸塵土、……明徹以奉值之慶、論道之善、脫憶代還生、猶冀奉覲、……雖欲申心、心何肯盡、不勝悲哀之誠、謹遣表以聞、この表が武帝に上呈されると、武帝は萬壽殿において、内外の名僧貴顯の前に開陳し、ために皆「一時に慟絶」したという。そしてこれに答えた武帝の返書には次のように言う。

增其憂歎、人誰不病、何以遽終過甚、……唯應

正念^{シテ}諸佛^ヲ、不捨^ニ大願^ヲ、與^ト般若^ヲ相應^ニ、直至^ニ種智^ニ、發^{スベシ}菩提心^ヲ、彼我相攝^ヲ、方結^ニ來緣^ヲ、……善思^{クイ}至理^ニ、勿^レ起^ス亂想^ヲ、覽^{ルモ}筆懷^ヲ、不^ニ復多^ク云^ハ、

この後、武帝は、明徹の住寺において彼のために三百僧會を設け、自ら懺願文を作つて懺悔せしめたとある。

これ等を讀んでみると、明徹の表は、専ら武帝に對する至誠の開陳が主内容となつており、これに應ずる武帝の返書には、宛も明徹の師父としての自信を持つて書き送つたかのような趣きがある。普通三年（五二二）、武帝は五九歳の時のことである。そしてここには、單に檀越と家僧という關係以上に、主従の關係ともいふべきものが認められると言つてよいと思われる。

三

ここで、彼等の個人的生活面に目を向けて見ると、「勅施^シ車牛人力衣服飲食^ヲ四時不^レ絕^ニ」〔法龍伝〕と言つた待遇を等しく與えられ、その莫大な給付は、寺を造營し千僧大會を行うに充分な程であり（法雲伝）、「雅勝^ル王公^ニ」（慧超伝）生活であつたと言つてよい。そしてそれはまた親屬を養う糧ともなつてゐた。本稿では述べ得なかつた後梁の僧遷の傳に、

初^メ、年少^{ニシテ}、孝慕^ク自然^ニ、家貧^{シタリテ}、親老^イ、珍養^ス或闕^ハ、後名德^ニ既立^チ、供^ニ餽腴旨^ヲ、進饋益陳^ス、及^レ處^ニ艱憂^ニ、毀^ク幾^{コトシ}致^ス滅^ス、

とあり、これは孝心の敦さを稱揚している文面ではあるが、出家者と雖も、俗人と同様に立身榮達を望み、老父母に充分な仕送りをして孝養を盡すことを自ら希求し、また世間からも要請されてゐたことを示している。このように日々の生活に充足しつつ、佛教の教理研究にいそむ名僧が、後輩の僧侶から羨望の眼で見られ、その目標となることは自然の勢いであらう。このような例としては

有^リ常供養^ス僧^ヲ、學^ブ雲法華^ヲ、日夜發^{シテ}願^ヲ、望^ム得^ニ慧解^ヲ等^ヲ之^ニ、〔法雲伝〕

〔道超〕聞^{キテ}龍光寺僧整始^ノ、就^ニ講說^ス、彌復^キ勇歎^{シテ}曰^ク、乃^チ可^レ無^ニ七尺^ノ、何事^ヲ在^ニ於人後^ニ、……因^{リテ}自懺悔^シ、求^メ諸佛菩薩^ヲ、乞^フ加^ニ威神^ヲ、令^リ其慧悟^ヲ如^ク僧^ノ也、〔統高僧伝卷六・道超伝〕

等が擧げられる。法雲傳の例が普通年間のことと考えられるに對し、道超傳の例は南齊代のことという相違はあるが、兩例共に、早く講席に着き名聲を得たいという青年僧の野望を示しているものと理解してよいであらう。

武帝は天監三年に「捨事李老道法詔」を公布し、一〇年

に「斷酒肉文」を公表し、一六年に宗廟の犠牲を廢し、また天下の道觀を廢する等の軌跡を残しながら、遂に一八年には菩薩戒を受けるに至るが、この佛教界の盛儀に密接に關與していた者に、僧正であり家僧であつた慧超と戒師となつた慧約がおり、また慧約に對立した法雲や戒師の候補に一度は擧げられた智藏等がいた。この法雲・智藏もいづれも武帝の家僧であつた。これらの人物の行動を通覽してみると、彼等はおおむね、武帝を南齊末混亂期の救世主と歓迎し、招請を受ける形をとりながら、その下に馳せ參じ、そして互いにもつれ合いつつ武帝に結びつき、次第に特權化した階層を形成して行つたと思われる。智藏に見られるような諫言の士としての姿、慧約や慧超に見られるような皇帝の側近としての姿、また明徹において最も典型的に見られる主從的絆で結ばれた姿等は、貴族士大夫としての意識を濃厚に持った梁代佛教界の代表者達の一面を窺わせるに足るものであらう。

一方、慧超や法雲、殊に慧超に見られるような僧正と家僧との兩面を併せ持った沙門が現われ、法雲や寶寵等に見られる武帝またはその一族のために祈福する沙門が家僧として現われている。南朝における僧正の職任が如何様のものであつたかは、なお不明確のままに残されている問題で

あるものの、殊に慧超が兩面を併せ持ち、武帝もまたその兩面を左程に區別せずに彼を用いていたと思われる點より推測すれば、僧正と言ひ家僧と稱せられてはいるものの、その職分に嚴然たる公私の區別があつたとは考えにくい。却つてそれ等の底に流れているのは、明徹と武帝との間に交わされた書信によく窺ひ得るような、判然とした主從の關係ではなかつたであらうか。このように考えることができるならば、沙門と稱しつゝも、その内實は、武帝の統制に組み込まれたものと言ひ得よう。沙門とは本來超俗の者とは當時の誰しもが標榜する所であるが、しかし實はこの姿勢こそが、貴族佛教の一面を如實に表わしているのではないだらうか。

貴族士大夫全盛の時代には、佛教者もまたその風潮に同調同化して行つたであらうことは想像に難くない。出家者として異形の姿を選び、俗に超越する姿勢を保ちながら、なお帝權の周りに群り集まり、榮耀榮華を誇つた僧の群れが現われていることも、決して偶發的事象ではなく、彼等が時代の趨勢を敏感に見抜き、それに乘じていった結果に過ぎないのである。

註

① 隋書卷二五・刑法志にも

武帝年老、厭_レ於萬機、又專_二精佛教、每_レ斷_二重罪一則終日不_レ擇、
と言っている。

② 「支那佛教盛時に於ける家僧・門師」また「梁の武帝の佛教信仰」『支那中世佛教の展開』所収

③ 前掲註②「梁の武帝の佛教信仰」には、保誌・僧祐・寶唱・智藏・慧約・慧超（靈根寺）・洪偃・寶瓊・安廩・慧勝・法規等の僧を挙げている。

④ 「江左妖僧攷——南朝における佛教徒の反亂について——」（東方宗教四六所収）

⑤ この他、家僧に類する厚遇を受けた者として天監一三年に九七歳で歿した寶誌、天監一七年以降に歿した寶唱、普通七年に五二歳で歿した惠超（靈根寺）等があるが、今は省くこととする。

⑥ 續高僧傳卷六。また梁高僧傳卷八僧宗伝にも見えている。

⑦ 前掲註②山崎氏論文

⑧ 統高僧傳卷一。また歴代三寶紀卷一一。

⑨ 但し、原本は全て曼陀羅が翻譯の任に當ったものであったこと、そして彼の死後に僧伽婆羅が翻譯の任に當ったことが、歴代三寶紀卷一一に見えている。

⑩ 歴代三寶紀一一による。僧正慧超とは後述する南潤寺の慧超のことであるが、續高僧傳卷六・靈根寺慧超傳には壽光殿學士たる彼が筆受の任に當ったと記されている。僧伽婆羅傳では「勅_二沙門寶唱慧超僧智法雲及哀曇允等、相對疏出」と

あり、また梁高僧傳卷二・求那毘地傳では寶唱・哀曇允の筆受を伝えるのみである。この南潤寺慧超と靈根寺慧超は同年（普通七年）に歿しており、續高僧傳中にもまゝ混雜が見られるようである。なお、阿育王經の翻譯が武帝に與えた影響については、横超慧日氏「中國佛教における國家意識」『中國佛教の研究』所収）を参照。

⑪ 梁高僧傳卷一一の僧祐傳の他、同卷一三・僧護傳・法悅傳等に見える。なお僧祐と經藏の造立及び劉勰との關係については拙稿「南朝梁の定林寺と衆經要抄について」（印度學佛教學研究二六一）参照。

⑫ 慧約傳にはこの他、齊・蕭子良の會坐における次のような話も載せている。

時有_二釋智秀・曇纖・慧次等一、並名重_二當隆一、同集_二王坐云、約既後至、年夏未_レ隆、王便斂_二躬盡_レ敬、衆咸懷_二不悅之色一、王曰、此上人方_レ爲_二釋門領袖一、豈今日而相待耶。

⑬ 沈約、また周顒と慧約との結びつき、彼の行動及びその意味するところ等の問題については、撫尾正信氏の論文「梁國師慧約をめぐる」（『和田博士東洋史論叢』所収）に述べられている。今は極く要點だけを述べるに止める。

⑭ 前掲註⑫撫尾氏論文。

⑮ 慧約は慧靜に師事したが、その歿後は誰にも就かず、註⑫に記したように、齊代、既に竟陵王會坐における慧次・智秀等の同僚として活動している。以下に述べる智藏・僧旻・法雲等が僧柔・慧次等に就いて學び、彼とは法系を異にしてい

たこと、及び天監一八年の當時には、僧祐・曇准・慧集等が既に死歿していること（僧祐には智藏が学び、慧集には僧旻法雲が學んでいる）を考えにいれると、當時の建康佛教界での、一面では法系的に孤立し、他面では最も年長者（僅かに法龍が一歳年長）であった慧約の、帝權に代表される俗界の權威を背景にして教界に臨まざるを得なかった姿が窺えるようである。

⑬ 續高僧傳卷五・僧旻伝によれば、既に天監五年には僧正としての慧超の名が見える。

⑭ また寺主としての慧超の一面をも傳える例として次のようなものがある。

初、（寶）瓊入京、將臨法席、既無人識、不許房居、乃求僧正慧超寄南澗住、超聞未許、見而駭曰、此少俊當紹吾今位、法門所託、何慮無房、即命寺綱、忻然處置、（統高僧傳卷七・寶瓊伝）

ここで、出三藏記集の記録に現われながら高僧傳に立傳されていらない慧令なる人物について述べることにする。彼は先ず梁高僧傳卷一三・法獻傳に、

獻律行精純、德爲物範、瑯琊王肅王融・吳國張融張綰・沙門慧令・智藏等、並投身接足、崇其誠訓、

と見え、智藏と共に法獻の門に入り、律學を修めている。この法獻は玄暢と共に、南齊武帝時代の二大僧主と言われた人物で、律學の大匠であり僧界の實力者であった。法獻には彼の歿後に碑を建てた僧祐がおり、慧令は、法獻門下として僧

祐の後輩に当り、また智藏の同輩でもあったことになる。但し、梁高僧傳卷八・僧宗傳に見える數論を善くしたと言う安樂寺慧令と、歷代三寶紀卷一一に記録する天監一六年に勅をうけて般若經抄一二卷を撰した靈根寺慧令が同一人物であるかどうかはわからない。續高僧傳卷七・寶瓊傳には、若い寶瓊（天監四年（陳至德二年）に「一切難聯環」して却つてやりこめられてしまふ僧正慧令の名が見え、また蕭子顯撰「御講金字摩訶般若波羅蜜多經序」（廣弘明集卷一九）には中大通五年（五三三）、武帝が金字大般若經を講説した際の参加者の中に、大僧正靈根寺慧令の名が記録されている。以上により、慧令は、法獻門下として僧祐・智藏と同門の律學者であり、天監九年の妙光事件の審問にはその名を列ね、以後天監一六年の般若經抄撰述を経ながら、遂には梁代後半、大僧正となるに至った人物であることがわかる。智藏と同齡と仮定すると、中大通五年當時は七〇歳半ばに達しており、僧界の長老として權威を保っていたであろう。

⑮ 白衣僧正論争については、鈴木啓三氏「梁代佛徒の一性格——白衣僧正論争を通して——」（史觀四九）に詳しい。また智藏の態度について、森三樹三郎氏著『梁の武帝』では、エゴイズムの発露と評されている（同書一六〇頁）が、そういう一面は見逃さないにせよ、當時、武帝に対して抗辨したのが彼一人だけであり、同時の慧約・慧超も、また僧旻・法雲ですらも沈黙を守っていたのであるから、強ちエゴイズムからの行動とはかりは言えないであろう。かえって「直言極諫の

士の態度に相通する」(鈴木氏論文) 一面に注目すべきではないだろうか。

①9 望月信亨『佛教大辭典』智藏の項に、智藏を戒師となしたと解しているのは誤りである。なお山崎宏氏前掲注③論文でも懸約とする。

②0 天監七年に衆經要抄八〇巻を編纂している。拙稿「梁代佛教類聚書と經律異相」(東方宗教五〇)「南朝梁の定林寺と衆經要抄について」(印度學佛教學研究二六一)参照。

②1 その性格の一端は、法雲傳の中の次の一節にもよく表わされている。

……自從王公逮于榮貴、莫不欽敬、至於吉凶慶弔、不避寒暑、時人頗謂之遊俠、而動必弘法、不以此言關懷。

②2 梁高僧伝卷一三・法鏡傳に、

今上爲長沙宣武王、治鏡所住寺、因改曰宣武也、とあることから、この時期は天監七年より末年頃までの間と考えられる。續高僧傳のこの部分には出入があるように思われ、或いは家僧となったのは宣武寺改名の後の事であるかも知れない。なお、梁書卷二五・徐勉傳には宣武寺を廣げるた

めに、徐勉の土地が提供されたことを記している。

②3 歷代三寶紀卷三・帝年下、天監一六年の條に、

六月、廢省諸州道士館、

とあるのに依る。山崎・森兩氏共に気付いておられない。佛祖統紀卷三七の記事は歷代三寶紀を典拠にしていると思われる。但し、今のところ、歷代三寶紀以外に同様の記録を見出すことができないため、なお一抹の疑問が残る。

* 梁代佛教の性格を把握するには、まだ多くの問題とすべき対象がある。本稿で採りあげた諸僧に關連するものとしては、例えば寶唱(彼もまた家僧的待遇をうけている)に代表される數々の編纂事業がある。また他には法超・明徹等が關係している律典の整備普及の問題があり、これに關連するものとして天監一八年における武帝の受菩薩戒の問題がある。これ等典籍の編纂は、いづれも天監・普通の時代に集中しており、本稿で述べたように、武帝の家僧或いはそれに匹敵する僧達が始ど武帝治世の前半に歿し去っていることと符節を合している。武帝治世の後半における僧徒の動向と同様、今後解明して行くべき課題である。

(本学助手 東洋仏教史学)